

---

Beach Sound **の恋**

ひろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Beach Sound の恋

### 【Nコード】

N4349M

### 【作者名】

ひろ

### 【あらすじ】

無事に大学1年生になり、生まれて初めてのバイトをする事になった<sup>とわ</sup>永久。

其処は繁華街にある、昼間は喫茶店、夜はバーへと姿を変える店だった。

それは大学生生活初めての夏休みだった。

今まで勉強ばかりで遊びもバイトもしたことがなかった。

しかし、無事に3流の大学に進学し、さて、自分は何がしたいのか・  
・・と思いついに“バイトをしてみよう”と思ったのだ。

夏休みをまるまるバイトに費やせば、もしかしたら、凡人の自分でも何か見つかるかもしれない。

そうしてバイトを始める事にしたのだった。

まさかそこで、自分の今後を左右する出会いがあるなんて、その時の俺、こと因幡 永久（いなば とわ）は思いもなかったのだった。

そこは繁華街の中にある飲食店。

夏休みの初日、今日から一月住み込みでアルバイトをする事になった場所だ。

昼間は喫茶店。

夜にはバーにそのすがたを変え営業するという。

特に何がしたい、という物がなかった俺は、未経験の地で、まして住み込みというのに興味を示しバイトの面接を受けたのだった。

経営者と昼夜の店長であるという3人の前での面接は結構緊張するもの。

経営者の、確か千葉といったか、その人は、きっちりとしたスーツに淡い色のサングラスをかけ、俺が書いた履歴書を見つめている。ちよっとした沈黙がながれそうして千葉は言った。

「君、本当に19歳？大学生？」

自分の姿が回りの人間にどのように映っているのか、嫌というほど知っていた俺はあからさまに嫌な顔をする。

色白で色素が薄く、身長は漸く165になった自分がどうみても中学生位にしか見えないのを良く知っている。

俺の反応に微苦笑を浮かべながら夜の店長であるという、佐伯さえきは口を開いた。

「悪く思わないでくれ。この店は夜お酒も扱うから、高校生とかだと色々問題があるんだ」

人の良さそうな笑顔に俺は逆に申し訳なくなってきた下を向く。

「誕生日が4月なので間違はなく19です。…でも、免許とかないので証明しろ、と言われても無理ですが…」

告げた言葉に昼の店長の如月が笑顔を浮かべた。

「千葉さん、信じましょう。大丈夫ですよ、きつと」

柔和な笑顔になごまされる。その言葉に千葉は一つ息をつき、俺のほうを向いた。自然と背筋を伸ばす。

「お前がそう言うなら…」

渋々、といった感じだったが、俺の人生初のバイトはそのように決まったのだった。

地下に伸びる階段を前に俺は気合いを入れる為に大きく深呼吸をする。

店の名前は『Beach Sound』。オーナーである千葉諒あきらが、海好きで命名したらしい。

店内はカウンターがあり、フロアーに客席が20ほどあるだろうか。落ち着いた色合いの壁紙で統一されたその空間は、妙に居心地が良い。

昼の店長、如月瑞季みづみがキョロキョロしている俺を出迎えてくれた。

「やあ、よく来たね、待ってたよ」

穏やかな笑顔で迎え入れてくれる。

「まずは君の住居スペースに行こうか？」

そう言うと、大きな俺のポストンバッグを持ち上げた。とても自然なその動きに、一瞬出遅れた俺は焦りながら如月に声を掛けた。

「あ、自分で持ちます・・・！」

焦りの含んだ俺の言葉に、如月は振り向き綺麗な笑顔を浮かべる。

一瞬ドキリとしてしまう程綺麗な笑顔に驚いていた俺に如月は言った。

「因幡くんが持つと、荷物が妙に重そうに見えるから・・・」

そんな事を言い、歩きだしてしまう。

どういう意味だ？と思いなながらも、遅れないように後を追った。

店の奥は以外にも広く、其処に鍵が掛けられる扉が一つ見える。如月は腰に付けていた鍵束から、一本抜くとそれを使い、扉を開いた。其処にはごく普通の玄関間口が見える。壁にあるスイッチを押すと、淡い色の電気が点いた。

きよろきよろと周りを確認しながら、如月に招かれそのままその部屋の中に入る。

玄関の直ぐ横にちょっとした料理なら問題ない程度のキッチンがある。その先に、1人暮らしでは十分な大きさの冷蔵庫があり、その横に又扉があった。俺の荷物を床に置いた如月は、視線に気付いたかのように口を開く。

「あそこは、他の水回りがあるんだよ」

そう言い、ご丁寧にもその扉を開いてくれる。扉を開けた直ぐ右隣りに又しても、扉があり、どうやらそれがトイレらしい。その隣に洗濯機があり、一番奥に風呂場があった。

「因幡くん、こっち」

何時の間にか移動していた如月に呼ばれ、水回り場を後にした俺は、その後の光景に口をあぐりとした。

キッチン等の部屋を仕切っていたスライド式の扉を開けていた如月の先に見えた光景に言葉もない。

「たまにうちの従業員が使ってたただけだから、そんなに汚れてないと思うんだけど・・・」

汚れているとか、そう言う問題ではない。8畳ほどのスペースに、簡易型のベッドがあり、TVは勿論、右側にはキャスター付きの椅子がセットになったデスクがあった。

本当に自分がここに住んでもいいのだろうか、と不安になる程、色々ついていて、空間も広い。

「・・・あの、俺、本当にここに住まわせてもらっていいんですか・・・？」

不安げに聞くと、如月は相好を崩した。

「問題ないよ。ここはもともと千葉さんがこの店オープンした時に住んでいた場所なんだよ。今は別の場所にマンション買ったから、ここを使う事は無くなったんだよね。このまま、空部屋にしてしまうのも勿体ないって事で、因幡くんに白羽の矢がたつたって訳・・・だから気にしないで？」

そんな事を言い、如月は腕時計を確認した。

「おっと、もうこんな時間。因幡くん、クローゼットに制服入ってるからそれに着替えて、店の方に来てくれる？」

そう言うと歩きだした如月だったが、玄関を出ようとし振り返る。

「ああ、そうだ、忘れてた。これ」

そう言うと、何かを投げてよこす。なんとかそれをキャッチすると、如月は再度笑顔を浮かべ

「じゃあ、後でね」

そう言うと玄関を後にした。

俺の手の中に無事にキャッチされたそれを確認すると、シルバーの鍵が光って見える。それをギュッと握り締め、クローゼットを開いたのだった。

初めてのバイトは思った以上にハードだった。

今まで、バイトと言う物をした事のなかった俺は、まず始めに厨房の皿洗いを任されたのだ。

次から次へと来る汚れ物に目が回りそうになりながらも、それを片づけて行く。

幼い頃から、母の手伝いをしていた為、決して苦ではなかったが、量が量なものだから流石に溜息が出る。

昼の12時から店はスタートし、午後の3時に一旦クローズする。

3時間程自由時間があり、夜の6時からバーがスタートし深夜の2時までの営業だった。途中1時間休憩時間があり6日間、皿洗いに没頭していた俺の効き腕の左が、昨日から悲鳴を上げる。どうやら腱鞘炎のようだった。

誰にも気付かれないように昼の営業が終わった後、近くのドラッグストアーに掛け込み、シップとサポーターを購入する。

店の奥の住居に入り、俺はベッドに突っ伏した。

「はあゝ・・・」

大きな溜息。ねっころがりながら左手首にシップを張り、サポーターを付ける。少し、痛みが和らいだように思い、そのまま目を閉じた。

そんな俺の耳に、扉がノックされる音がする。片目を開け扉を見ると、今度は声がした。

「永久、いるか？」

夜の店長、佐伯さえき音羽おとはの声だ。とたんに心臓が鼓動を速める。

面接の時の人の良いイメージは、初日に覆されたのだ。

180はあるであろう長身に、鋭い眼光。モデルのような顔立ちを

しているのに、人を小馬鹿にしたような態度が、妙に目に付く。冷たい視線を感じた俺は、いつの間にか彼に苦手意識を持っていた。出たくない・・・けれど、大事な用かもしれない、と思いつ方なくベッドから立ち上がる。嫌がる足に叱咤しながら玄関まで向かいその扉を開いた。

細身の長身が、俺を見下ろす。冷たい、鋭い視線を感じながら声を発した。

「あ、の何かありましたか？」

「・・・上がるぞ」

強い言葉が発せられ、そのまま自分の横を通り越して行く。あつと言う間に靴を脱ぎ、部屋に上がった佐伯に呆然とした。その場から動けない俺に、更に堅い声が掛けられた。

「お前も早く来い」

有無を言わさぬその言葉に、かちんと来るものがあつたけれど大人しく従う。

「突然どうしたんですか？俺、なんか問題でも起こしましたか？」背を向けていた佐伯は苛ついたように振り返り、痛む左腕を無言で掴んだ。

突然の事に堪えきれずに小さく痛みを訴えた俺を佐伯は見逃さなかつた。

「・・・やっぱり。なんで早く言わないんだ」

威圧感たつぷりにそう言われ、俺は首を竦める。

頭上から小さな溜め息が聞こえた。

佐伯の手がサポーターを剥がすと、ますます痛みその手を引っ込めようとするけれど赦して貰えない。

困惑しながら上目遣いに佐伯を見た俺は、思いの外真摯な眼差しがそこにあり動きを止めた。

「サポーターだけじゃ無理だ」

徐にそう言つと、佐伯は手に持っていたビニール袋から何か白い物を出した。なんだろう、と思いつ物を確認しようとした俺は、ぐいつ

と左手首を引つ張られ悲鳴を上げそうになる。佐伯はそんな俺にはお構いなく手首に何かを巻いていた。そろりと見ると、それはテーピングだった。手際良く巻かれていくテーピングをボーっとしながら見ていると、あつと言う間に出来上がった。

「動かしてみろ」

佐伯に言われ、大人しく従う。きつちりと固定された手首は、少し動かしずらかったが痛みは殆なかった。

じっくりと手首を見ていると、頭をポンと叩かれた。決して痛くはないその行為に顔を上げると、優しい笑顔が其処にあった。思わずドキリとする。

「バーの時間までゆっくり休め」

優しくそう言い、俺の横を通り過ぎた。其処で初めて気付く。お茶などを出すべきではないか?と思つた俺は、急いで口を開いた。

「さ、佐伯さん!」

俺の言葉に佐伯はゆっくいと振り返る。

「なんだ?」

「あの・・・今、お茶でも淹れますので座って下さい」

俺の言葉に、佐伯は困つた様な顔をした。何かまづつただらうかと心配になる。

「ああ・・・気持ちはありがたいが、やる事があるから。それじゃ」  
そう言われてしまえば、もう引き止めるすべはない。扉を出て行く  
佐伯の背中を、俺は無言で見送つた。

ぱたん、と閉じた扉を見詰め、其処でお礼を言っていない事に気付いた俺は1人で青い顔をしていたのだった。

バーの開店の時間。俺はテーピングで固められた手首を気にしながらキッチンにたった。しかし、其処には既に別の人間がいる。

あれ?と思つた俺に、同僚が声を掛けた。確か俺とあまり年が変わらない人で、矢沢と言つたか・・・。

「ああ、因幡はホール」

短く伝えられた言葉に困惑する。視線を彷徨わせながら、とりあえずホールの方に向かうときびきびとした佐伯の音が聞こえた。何かを指示しているようだ。俺は声を掛けられずにその場に立ち尽くしていた。

そんな俺を佐伯が振り返る。険しいその表情にびくりとする俺に、佐伯は更に険しい顔をした。

「因幡！」

低い声で呼ばれ更に固まる。

「今日からお前は俺と一緒にフロアーに入ってもらおう」

端的に告げられ一応頷いた俺は、しかしその格好はキッチン用であり、どうするのかと視線を佐伯に向けた。

「じゃあ、持ち場に入って」

佐伯の言葉に、フロアースタッフは蜘蛛の子を散らすように持ち場に散っていった。その場に残ったのは俺と佐伯だけ。振り向いた佐伯は顎で俺を促した。

行きついた先はロッカールーム。ロッカールームに備え付けられた倉庫から、佐伯はフロアー用の制服を出した。

「これに着替える」

威圧的に言われ、それを受け取ると佐伯はロッカールームを後にした。

それは黒のデニムに、店のロゴが入った紺色のTシャツ、そうして黒のギャルソンエプロン。

とりあえずデニムを履くと裾が余ってしまった。妙に居たたまれなくて急いで裾を折る。今度はTシャツに袖を通すと、やっぱり何だか大きかった。

「・・・嫌がらせか？」

どうせ、俺は小さいですよ・・・。不貞腐れそうになるけれどグツと我慢し、今度はギャルソンエプロンを腰に巻いた。他の人間が着けているのを見よう見真似しなんとか巻きつけると、まあ、それな

りの格好になった・・・気がした。

「着れたか？」

扉が急に開き、佐伯が顔を出した。取り敢えず着た俺を値踏みするようにな、上から下へと視線を這わせる。

居心地の悪い物を感じるけれど我慢し、次の言葉を待った。佐伯は無言で近寄り俺のギャルソンエプロンを解く。そうして手際よく巻き直した。

「・・・随分と細いな」

そう呟くと、再度出来上がった俺の姿を上から下までしっかりと見

「まあ、こんなもんか」

と言ったのだった。

バーの仕事はキッチンよりもゆるりとしているが、笑顔を絶やさず、可笑しな客にも親切に接しないとイケない。

もともと人付き合いが苦手な俺は、それはもう初日から佐伯さえきに叱られた。

「笑顔」

常に俺の斜め後ろにいる佐伯の低い声が聞こえる。俺は意識し笑顔を湛えた。客も慣れた物らしく、後ろにいる佐伯に

「新人？」

等と声を掛けてくる。何時もは仏頂面の佐伯も、流石店長というだけあり優雅な笑顔で答えていた。

「はい、何も知らないもので、ご迷惑をお掛けするかと思いますがご容赦下さい」

その言葉に、女性客は頬を赤らめながら綺麗な笑顔を俺にまで向けてくれる。

「君、名前は？」

そう聞かれ、戸惑いながら視線を佐伯に送った。佐伯は無言のまま、諭すように顎を動かす。言え、という事らしい。

俺は女性客に視線を戻し、今できる最高の笑顔を湛え

「因幡いなばと申します」

鼻に付く香水の匂いに、笑顔が引きつりそうになるけれどグツと我慢した。

「きゃー可愛い！」

黄色い声が上がリ、思わず眉が引きつる。途端に背後に居た佐伯に突かれた。

「一杯どう？」

そう言われ困惑する。ここはホストクラブか？

「いえ、すみません。自分まだ未成年なので・・・」

引き攣る顔を堪えながら、申し訳なさそうな顔を作ると、再び黄色い声が上がった。

「そうなんだ。残念」

まだまだ、きやつきやつしている女性客に頭を下げ、その場を後にする。引き攣ってしまった頬を撫でながらバックヤードに向かうと、後ろにいた佐伯が小さく笑った。

不審に思いながら振り返ろうとすると、俺の頭部大きな手が添えられる。

「永久、顔が引き攣ってるぞ」

くつくつと笑いながらの言葉に、頬部の体温が急上昇したのがわかった。一瞬、この大きな、温かい手にもっと触れて欲しい、と思ってしまう。

そんな自分の反応に驚きと戸惑いを感じながら、しかし、やっぱり手を振り払う事ができなくて、俺は俯くしかなかった。

佐伯にテーピングしてもらった左手首が、違う痛みをもたらした。

初めてのホールでの仕事に心底疲れてしまった俺は、風呂に入る事も出来ずにベッドに倒れ込むと、そのまま意識を手放してしまったらしい。

繰り返して設定されていたアラームが鳴り、重い瞼を開くともう陽はだいぶ上に上がっていた。

時計を確認すると、朝の10時30分を指している。ぎしぎしと音が鳴るのでは？と思う程身体が軋んだ。

昼の仕事がスタートするまで1時間30分ある。俺はゆっくりと起き上がりシャワーを浴びる為ベッドを後にした。

下着などを準備していると、玄関がノックされる。一瞬、佐伯？と思っただけれど、それは筈はないのは十分承知していて、俺は静かに

扉を開いた。

「因幡くん、起きてた？」

そこには昼間の店長、如月おきづき 瑞希みずきがいた。ふわりと漂う綺麗な空気に何故だか癒される。俺は居住まいを正した。

「どうしたんですか？如月さん」

俺の問いに困ったような顔をする。ますます意味が分からなくて如月の顔を凝視した。

「・・・あの？」

「ちよつと出かけられる？」

俺の問いかけと如月の声はほぼ同時だった。

ん？・・・出かけられる・・・？何処に？！

とたんに如月はくすくすと笑い出した。どうやら、顔に出てしまったらしい。顔を引き締め、問いかけた。

「あの、何処に行けば？」

1時間30分しか時間がないからあまり遠くは勘弁して貰いたい。言外にそう含ませると、如月はやっぱり困った顔をした。その反応が何時もの彼らしくなくてこっちまで困惑する。

何時もの如月はふわりとした印象だけれど、ときばきと仕事をこなし微笑みながらも注意もしっかりできる人だ。佐伯とは違うけれど、やっぱり店長を任されるだけの人だなあと思うのだ。しかし、今は何でだか妙に言い淀む感じがある。

「・・・如月さん？」

とりあえず再度声を掛けてみると、ああ、というような顔をし俺を見た。

「因幡くんも知ってるよね、うちの姉妹店がお台場にあるの」

勿論知っている。オーナーの千葉はものすごく金持ちらしく、似たような店を各地にオープンさせているらしい。

従業員もかなりのイケメンや美女を使っているらしくネットの世界では色々な意味で注目を浴びていた。

その一つがお台場にある。観光客や外人、サラリーマンなどが顧客

にいる。

「はい。3号店ですよね？」

答えると、如月はそうこうを崩した。

「実は今日、あそこでオーナーのパーティーがあるんだ」

パーティー…？

それと俺がどう関係しているのか。

理解出来なくて、如月を見た。

「沢山の人があるからあそこのスタッフだけじゃ、賄えないんだよねえ」

ふわりと言いながら、もしかしてこの人はとんでもない事を言っているのでは？意味を悟り、俺は急いで口を開いた。

「いや、俺無理ですよ?!まだホールデビューしたの昨日ですし、俺なんか連れて行っても役にはたたないかと…」

俺の必死な抵抗にも、しかし如月は申し訳なさそうに笑うのみだった。

「僕も一応、そう言ったんだけどね、音羽おとばは言い出したら聞かないから」

どうやら決定事項らしい。俺は小さく溜め息を付き、出掛ける支度にとりかかったのだった。

ヘルプへ向かうのは如月と俺、そうしてもう1人夜のバイトひといちの柵まさきという、年は22歳のベテランが向かう事になった。

取り敢えずカバンに昨夜支給された衣服を詰め、Beach Soundの入口へ向かった。

外に出るとすでに柵が、その長身を屈めながら煙草をふかしている。俺はちよつと気後れしながらも挨拶をした。

「お、因幡っちか。大変だねえ」

のんびりと言いながら手をヒラヒラとさせる。俺は曖昧に頷きながら柵の横に居場所を確保した。

特に会話をする事もなかった為、ジツとしていると視線を感じる。視線を上げると、柊が見詰めていた。

「あ、の…何か…?」

気まずいものを感じ、声を発する。柊はにっこりと笑い、よく解らない事を言った。

「いや、因幡っち綺麗な顔してるなあ〜と思ってね。見惚れてた」人の良さそうな笑顔。俺はやっぱり困惑しながら笑うしかなかった。その背後から、不穏なオーラが漂う。ギクツとし恐る恐る背後を確認すると、眉間にシワを寄せた佐伯が立っていた。

「てんちよ〜だあ〜」

柊ののんびりした声に、ぴくりと眉を動かした佐伯は徐に俺の頭を掴む。そうして低い声で一言言った。

「行くぞ」

地を這うような声に震え上がりそうになりながら歩き出す。横では何故だか柊が苦笑を浮かべていた。

## STORY 4

店内に入ると、途端に厳しい声が聞こえた。

「違う！それはここだ、お前は文字も読めねえのか?!」

怒気を含んだ声に、自分に言われてもいないのにびくついてしまう。隣からは佐伯と柊の溜め息が聞こえた。

「あの馬鹿は…」

言葉と同時に佐伯が歩き出す。そうして、怒気のオーラを醸し出している男の頭をはたいた。

怒気が一気に膨れ上がり、その人が勢い良く振り向く。とたんに相好が崩れた。

「…佐伯さん！」

知り合い？

疑問符をそのままに柊を見ると、俺の思いを汲み取ってくれた。

「あの人はこここの店長の、荒木 静樹（あらかき しずき）さん。

元々うちにいたんだよねえ」

成程。妙に納得する。ちらりと、2人を見ると、荒木の妙に嬉しそうな笑顔が目に入った。

何故だかイラっとする。

「荒木さんは、本当に佐伯さんの事好きだからねえ、あんな笑顔にもなるんだよ」

俺の胸の内を知っているかのような柊の言葉にもイラっとする。そんな自分の反応に驚きながらも、そっぽを向いた。小さく柊の笑い声が聞こえた気がした。

制服に着替え、慌ただしく準備が進められていく。

俺も佐伯からの指示になんとか答え、動いていると鋭い視線を感じ

た。

初めは気のせいかと思っていたけれど、その視線があまりにも敵意剥き出しのような気がして気になる。恐る恐るといった感じで視線を這わせ敵意の元を探した。

そうして視線を這わせた先に、とても綺麗な、日本人離れした顔の人物を発見した。痛い程の視線はどうやらその人から送られてきているらしい。

俺、なんかしただろうか???

あんなに美人な人間から睨まれる覚えはない。というか、知り合いですらないのだ。敵意などという物を向けられるはずはない。……ないはずなのに、やっぱり視線は俺を捕まえていた。

困惑している俺の耳に苦い声が聞こえた。

「慧……」

それが柀の物と解ると、俺は視線を向ける。柀の端正な顔が少し歪み、そうして俺を見た。

「因幡ちゃん、ちょっと抜けるね……?」

申し訳なさそうに笑い足早に睨み付けている彼の元に向かう。そうして徐にその彼の手を掴みフロアーを後にした。

ぽかん、としてそんな2人が出て行った扉を見ていると、大きな手が俺の後頭部を軽くはたいた。振り返る事をしなくてもそれが誰の物が解る。

「どうした?……ん?柀は?」

出て行った事を告げていいのか悩み、頭を振ると存外に優しい視線が降ってくる。だからなのか、すんなりと言葉が出てしまった。

「あの……凄く綺麗な子と出て行きました」

佐伯が一瞬眉間に皺を寄せる。そうしてフロアーをぐるりと確認するとフツと笑った。

その笑顔があまりにも魅力的で視線を外せずにいた俺に、佐伯は更に笑顔を深める。

「そうか、……多分その子は慧、飯塚いづか 慧けいだな」

確かに、柊も『慧』と呼んでいたような……。なんとなく理解したような、しないような……。だって、なんであの子は何に對してあんなおっかない顔して睨んでいたのか、其処が解らない。なんとなく解せない顔を見ると、佐伯は更に笑った。

「なに？お前、慧に睨まれたか？」

凶星で驚く。俺は無言でこくこくと頷いた。

「慧は、そりゃ物凄く嫉妬深いんだ。多分、お前に優しい柊を見てヤキモチ妬いたんだな」

笑いの含んだ言葉に、俺はやっぱり理解できない。

確かにあの子とはとても綺麗な子だったけれど、どう見ても男だ。女には見えなかったはずだ。そんな彼に何故嫉妬されなければならぬのか……。

やっぱり解せない俺は佐伯を見た。いつもなら自信たっぷりな佐伯も、飲み込みの悪い俺に困惑したのか曖昧に笑うに留めたのだった。

「君！こつち！！」

大きな声に呼ばれ、俺は小走りに客の元に走って行く。オーダーのようだ。

俺は他の客の声で聞き取りづらいオーダーをなんとか聞き取り、バツクヤードに小走りに向かう。

バーテンダーにオーダーを伝え作ってもらうのを待っている間に、向こうから慧が向かって来るのがわかった。

何故だか思わず身構えてしまう。慧も気付いたらしくその綺麗な顔をぴくりと震わせた。

「安岐さん、ジントニツク2つ」

バーテンダーに注文をし、俺と少し距離を開けた所に陣取る。俺は視線を外し、フロアーに目を向けた。

しかし、其処だけなんだかとても静かな空気が流れ、俺は居心地の悪い物を感じる。

ちらりと慧を盗み見ると、同じように俺を見ている視線とぶつかった。急いで視線を外すと、小さな声が聞こえた。その小鳥の様な耳触りの良い声に、再度頭を動かす。今度はしっかりと視線がぶつかった。

「・・・さっきは睨んだりして、ごめん」

正直驚いた。まさかこんなに素直に謝られるとは思わなかったのだ。

「あ・・・いや、気にしていません」

俺の言葉に、何故だかとても驚いた顔をした後、その綺麗な顔を笑顔に変えた。

「良かった。僕、飯塚 慧ってゆうんだ。仲良くしてね」

一瞬にしてまたしても表情が変わる。表情が色々変わるなんてなんだか羨ましいな、などと思ってしまう。

もともと表情に乏しいと言われていた俺には無い芸当だ。だからか、とても慧が可愛らしく思えた。

「あ、俺は因幡です」

名乗られたので一応伝える。

「下の名前は？」

そう聞かれ、素直に答えた。

「そっか、永久くんか・・・永久って呼んで良い？」

小悪魔的な笑顔に変わる。見惚れる、とはこういうのをいうんだろ  
うなあ、なんて漠然と思いつつ承した。

「僕ね、自他共に認める嫉妬深さなんだ」

突然告げられて、曖昧に頷く。途端に笑顔が消え、又しても表情が変わった。怖い程の無表情に俺は固まる。

「まよ枉は俺のだから、変な気起こさないでね」

決して低い筈はない慧の声が、何故だか地を這うようなそれに聞こえ俺は急いで首を動かしていた。

それに納得したのか慧の表情がまたしても変わる。綺麗な笑顔が俺

に向けられ、俺は息を吐くしかなかった。

「バーボン2つとジン2つ上がったよ」

バーテンダー安岐のハスキーボイスが俺たちの間を抜ける。慧と俺は急いでそれを受け取りフロアーに散っていった。

パーティーはあつという間に過ぎて行く。

俺は慣れない仕事に心身共に疲れきって、そろそろホントにやばいかも、と思った時、お開きを告げるオーナー千葉の挨拶が流れた。壇上上がった千葉は、いつにもましてびしっとしたスーツで身を包み、来場した客に挨拶をする。

その最中に、何時も無表情の千葉の顔が、ほんの少しだけけれど笑顔に変わった気がした。千葉の視線がある一か所を捉えているのかわかり、俺は視線を這わせる。其処にはやっぱりスーツに身を包んだ昼間の店長、如月<sup>きんづき</sup> 瑞希<sup>みずき</sup>がいた。

まさか彼もこのパーティーに居たなんて全然しらなくて驚く。パツとオーナーを見ると、もう何時もの無表情に戻っていた。その不思議な空気、しかしまだ俺には解らなかったのだ。

俺は何故だか見ては行かない物を見てしまった気がして、急いで視線を戻し近くのテーブルの片付けに入ったのだった。

客が引いた店舗は、そりゃー酷い状態だった。

俺を含め、フロアスタッフが最後の仕事、所謂片付けに取り掛かる。そんな俺に佐伯<sup>さえき</sup>が声を掛けてきた。

「お疲れ。お前はもう帰っていいぞ？」

ミネラルウォーターのペットボトルを手にしながらそう言われ、俺は戸惑った。

「え、でもまだ片付けが・・・」

周りを見渡すと、まだまだ汚れたままだ。流石にこれを残して帰る程、俺は無責任であるつもりはない。

「俺も最後まで残ります！」  
言いきって、俺はフロアーに戻って行った。

のはやっぱり間違いだっただけだ……。  
片付けが終わり、みんな帰るのかなと思った俺は、しかし打ち上げと称した愚痴大会に捕まってしまった。

オーナーの千葉と如月は、片付けが終了したと同時に“打ち上げ代”を置いて帰って行った。

俺は酒を片手に管を巻いている慧に捕まっている。

「みんな証がかっこいいからって、変な目で見ないでよねっ」

既に呂律が回っていない。俺はうんざりしながらお茶の入ったグラスを煽った。

そんな俺に慧は又しても絡んでくる。

「とわ、何飲んでるの？」

俺のグラスを取り上げ中身を飲んでしまう。そうして眉間に皺を寄せた。

「なにこれ、お茶じゃん」

俺は急いでグラスを取り返す。

「一緒にのめよ。……はい、これ」

再びグラスを取り上げられ、違う物が手渡される。それは明らかにお酒で、俺はフリーズした。

「ちよつと！……僕の酒が飲めないの？！」

どんな親父だよ……。横でぎゃいぎゃいと絡んで来る慧に、俺は諦め仕方なく其れに口を付けようとした。

瞬間、手の中からグラスが引き抜かれる。

「慧、いい加減にしる。永久はまだ未成年だ。飲まず訳にはいかな  
いんだよっ」

苛立ちの含まれた言葉は佐伯のものだった。助かったけれど、なんだか場の空気が悪くなってしまったようで余計に焦る。

慧はみるみる内に不機嫌になり、その綺麗な唇からとんでもない事

を吐き出していた。

「なんだよ、佐伯さん。そんなおっかない顔してさっ。オーナーに如月さん盗られたからってやつあたりしないでよね!」

「慧!」

言い終わると、柾の怒鳴り声とは略同時だった。

周りが一瞬にして静まる。ただ佐伯がグラスを置く音だけが妙に響いた。

だけど俺はそんな事にも気が回らない程動揺している自分に驚いて、佐伯の表情を確認するまでには至らない。

「・・・どっという意味だ?」

低い、佐伯の声が木魂する。明らかに怒気が含まれた言葉に、しかし慧は譲らない。

「佐伯さんは、如月さんの事好きなくせに何もしなかったじゃないか!」

悲鳴にも近い慧の言葉に、流石に切れたのは佐伯ではなく柾だった。何時もはとも温かな柾が、鬼の形相で立ち上がり慧の腕を掴み上げる。痛みに悲鳴を上げた慧に、しかし柾は許さなかった。

ほぼ捻り上げるようにし、慧を引っ張る。そうして静かにその場の全員に告げた。

「すみません、こいつだいぶ酔ってるようで・・・。このまま連れて帰ります。佐伯さん・・・ホントすみません!」

深々と頭を下げ慧をひっつかみながら店を後にしたのだった。

始発にはまだ時間がある。

あの後、他の人間も蜘蛛の子を散らすように解散した。

今、この店には俺と佐伯しかない。始発には後1時間程時間があつた。

俺は片付けを手伝いながら、さっき慧が言っていた事を思いだしていた。

慧は、如月さんを盗られた、と言っていた。それはつまり佐伯は如月が“好き”と言う事になる。でもしかし男同志だぞ？

そんな事があるのだろうか……。そこである事に思い当たる。

確か、佐伯は慧はとつても嫉妬深い、と言っていた。慧も柊は自分の物だと、俺に牽制をした。

つまりだ、あの2人は所謂恋人、という関係なのか?! だから柊に優しくされていた俺に嫉妬したのか。

色々と絡まっていた糸が解れた気がした。

そしてもう一つ思い当たる事がある。

この関係図で言うと、オーナーの千葉と如月も恋人同士?!

とんでもない事を知らされてしまった気がする。

しかし、それとは別に何故だかもやもやとした物が自分の胸の中に生れている様な気がした。

其れが何なのか解らなくて少しイライラする。そうして、ガタガタとテーブルを直している佐伯を見た。

同姓同士の恋愛って、どんな物なのだろう。男女の恋愛って、仕事帰りに食事したり、休みの日にはデートするんだろう。そうしてキスしたりそのあとの事だっするんだろう。同姓とはどうなのだろう？

食事したりデートしたりはできるんだろうけど……その後は……

？

「永久？」

突然近くで声がした。

俺は文字通り飛び上がってしまう。俺のそんな反応に、声の主佐伯は心底驚いたような顔をしていた。

「あ、ああ悪い、声掛けたんだが返事が無いから具合でも悪いのかと思ったんだが」

色々思い悩んでいて、掛けられた声が聞こえていなかったようだ。

俺は急いで居住まいを直し謝罪した。

「いや、別に謝る事はない。今日は最後まで付き合わせて悪かったな」

言葉と同時に、何時ものように頭に手が置かれる。瞬間、自分の顔が赤くなったのが解った。

そんな事には気付かずに、直ぐに佐伯の手が離れて行く。俺は其れを目で追いながら、何故だかもっと触れてほしい、と思ったのだった。

## STORY 6

始発に佐伯と2人で飛び乗り、何とかBeach Sound<sup>ビーチ サウンド</sup>まで辿りついた。

俺が部屋に入ろうとすると、呼び止められる。変な事を思ってしまった俺は、出来れば振り向きたくなかったけれどそれも言っていない。

仕方なく返事と共に振り返ると、何かを投げて寄こす。慌ててキャッチすると、其れはビタミン飲料だった。

「今日は喫茶の方は休みになってる。取り敢えず其れ飲んでバーのオープンまでゆっくり休め」  
そう言い置いてさっさとその場を後にした。

俺は佐伯の優しさに触れ、再び頬が熱くなるのを感じる。急いで入口のカギを開け、中に入った。

着替えるのも億劫でそのままベッドに倒れ込む。そのまま眠れるかと思っただけで、突然痛めた左手首が痛みを訴えてくる。

そういえば、パーティーの時邪魔でテーピングを外してしまっていたのだ。

ズキズキと痛む腕に、しかしテーピングをするのも億劫でサポーターだけを無理矢理眠りに着いたのだった。

なんとかバーの仕事をこなす。終が何時ものように優しくサポートしてくれていたから、腕の痛みもあまり気にならなかった。  
別の事に気をとられていたのもあるけれど、敢えてそれを考えないようにしていた。

忙しく動いていた俺に、突然佐伯が声を掛けてくる。

「永久、柁と10分休憩」

事務的に告げられて、何故だか分かりずる。

またあの大きな手に触れてもらいたかったのだ。そんな自分の浅ましい程の思いに愕然とする。

これはまさか…と思い当たる名称が形になる前に、柁に思考をストップさせられた。苛立ちと感謝、両方の複雑な思いを隠し柁に対峙する。

「因幡ちゃん、行くよ？」

彼の言葉に素直に従い、バックヤードを通り抜けた。休憩室のソファに腰を降ろすと、昨日からの疲れが一気に襲来する。俺は柁が居るのもお構い無しに、盛大に溜め息を吐いた。

「大丈夫？あんま顔色良くないけど…」

柁の優しい言葉も、何故だか今は鬱陶しく思えてくる。

「ああ、大丈夫です。それより、昨日は慧大丈夫でしたか？」

投げ遣りに聞いてみると、柁はそれはそれは申し訳なさそうな顔をした。

「因幡ちゃんにも迷惑掛けたね…。普段は良い子なんだけど、なんでか昨日はああなっちゃったんだよね」

良い子なのはあんたの前だけなのでは？と思うけれどそこは流石に言えなくて、別の気になる事を口にした。

「柁さんと慧って…、その…」

口にしようと思ったけれどデリカシーが無さすぎるのでは、と思い躊躇してしまう。一瞬、間があつたけれど柁は幸せそうな笑顔を湛えた。

「ああ、恥ずかしいけど、お付き合いしてるよ」

堂々と認められてしまうと返す言葉が見付からない。なんて自分は野暮なんだ、と思い羞恥で顔が赤くなってしまった。

「理解してもらおうとは思わないよ。だけど俺と慧は本気だから」

ああ、失敗したと思った。決して冷やかしかそんなんじゃない、ただ自分の憶測じゃなくて真実を知りたかったのだ。柁は笑顔を浮

かべてはいるけれど、それが諦めの其れに見えたから、俺は急いで言葉を紡いだ。

「あ、あの、別に偏見とか、俺ないので…。ただちょっとびっくりしたと言うか…」

やっぱり、気のきいた言葉は出てこない。それでも、明らかに柗の顔色が変わったのが解った。

「ありがとう…。慧も喜ぶよ」

満面の笑顔だった。だから、なのか自然と言葉が飛び出してくる。

「もう1つ良いですか？」

疲れていたはずなのに、昨夜慧が発した言葉が気になり言葉を選びつつ聞いてみた。柗はなに？という風に首をかしげる。

「あの、…佐伯さんは本当に如月さんの事、その、好き、なんですか？」

俺の言葉に、一拍の間がありそうして柗は苦笑を浮かべた。

「ん…、俺も真相は知らない。でも、元々あの2人は学生時代からの友人であることは間違いないよ。それでとつても仲が良いから短い間だったけどそんな噂があったのも事実ではあるね」

なかなか歯切れの悪い物言い。

しかし、煙りのないところには火は立たないとも言っし…。

そんな事を思っていると、急に胸が締め付けられるような痛みが襲った。思わず胸を抑えると、柗の心配そうな声が聞こえる。急いで顔を上げ、笑顔を作った。

「なんでもないです。大丈夫」

なんとか、笑えているはずだ。

俺は、ペットボトルを握んでいる手に力を込め、なんとかその痛みを凌いだのだった。

漸くバイトが終わり、俺はベッドに倒れ込む。

休憩が終わった後、なんとか胸の痛みが去ったと思ったのも束の間、

佐伯に声を掛けられた時休憩時とは違う胸の痛みが襲った。それが昨夜感じた物と同じような気がして驚く。

更には、佐伯が他の人、と言っても客だけれども…その人に優しい笑顔を振りまいている所を見た時明らかにおぞましい感情が俺を支配した。

あの視線を独り占めしたい。しなやかに動く手で触れて欲しいと思っってしまった。

ベッドの中で盛大に溜息を吐く。

自分の気持ちが無なのか、ずっと考えていた。

初めは佐伯の事が苦手だった。横暴な態度も無性に腹が立ち、こんな所でやっていけないのかと心配になる程だった。

だけれど時間が経つにつれ、佐伯の仕事への信念が伺えて何時の間にか目で追うようになっていた。そうして尊敬できる対象へ変わって行く。

何気ない接触が、とつても心地良い物である事を知った時、自分の中に何かが生まれたのに気付いた。

それは多分、今まで体験した事のない物。

だから変化が起きた時、直ぐには解らなかったのだ。でも今は違う。このもやもやした物、佐伯の言動、行動で痛みを変える胸の疼き…。

所謂これがきつと“恋”なのだ。

そう、認識してしまえばもう収まらない。

其れに比例するように左腕が痛み出す。

はちきれんばかりの想いが一気に噴き出してきたので、俺は壊れそうだった。いつその事想いをぶつけてみようかとも思ったけれど、頭に如月の事が浮かんだ。

そうだ、佐伯は如月の事が好きなのだ。俺の想いなんて知ってしまったら、きつと気まずいに決まっている。何が何でも伝えるのは拙いだろうし、弱い俺の事だから、きつと壊れてしまう。

ぎゅっと目を瞑り、無かった事にしようと心に決めたのだった。



喫茶店の仕事が終わりに数時間後、バーのフロアーに立っていた俺の前に驚きがあった。

「如月……店長……？」

居るはずのない如月がフロアーで接客をしている。

呆然としている俺の横に、佐伯が近付き、苦笑交じりに俺の頭に手を置いた。

それだけで、ドキリとしてしまい戸惑う。

「急に柁せなが来れなくてフロアーが大変って話したら“あれ”だ」  
その言葉が嬉しそうに聞こえて、胸がきりきりと痛んだ。

ああ、やっぱり俺の憶測は間違っていないと知らされているようで、落ち込む。

1度落ちてしまったけれど、頭を振り下っぱら辺りに力を込め笑顔を作った。

「如月さんが居てくれると、俺なんだか心強いです」

そう言つて佐伯の顔を見た。笑顔であるうと思つていた佐伯の顔が、しかし不思議に歪む。

あれ？と思つた時には、もう元のきりつとした顔に戻っていた。

見間違い？と思つたけれど妙に胸に引っかかる。疑問があつたけれど、其れを口に出せる程、俺は図太くなかった。

再度自分に気合を入れ、佐伯から距離を取る。そうして忙しいフロアーの仕事に入つて行つた。

「因幡くん、だいぶ板に付くようになったね」

ふと客足が遠のいた時、如月が近付いて来て、そんな事を言った。

「いや、まだまだです。・・・バイト期限のもう半分に近い来てるのもつと頑張らなくちゃと思ってるんですよ」

笑顔を作りながら告げると、如月は綺麗な笑顔を湛えた。

「そうだね、あつという間だね。因幡くんは良く頑張ってるよ。仲間とも仲良くなっているみたいだし。・・・ねえ因幡くん」  
急に笑顔を引っ込め呼ばれる。

俺は何故だか居住まいを正し、そんな如月の顔を見た。

「はい？」

俺の返事に一拍を置き、口を開く。

「・・・夏休みが終わってもこのバイト、続ける気はない？」

驚いて、思わずしげしげと如月の顔を見た。

「初めは大丈夫かな？って思ったけど、因幡くん客受けも良いし、真面目だからこのまま一緒に働けたらいいんだけど」

ますます俺は言葉が出てこなかった。その時、店の入り口が開き、客が来た事を告げる。

如月はスマートな動きでメニューを手に取り、そうして俺を振り返った。

「ちよつと、考えてみてよ」

そう言い残すと、新しい客の元へと歩いて行ったのだった。

次の日も、又次の日も、なぜだか柘は仕事を休んでいる。佐伯にそれと無く理由を尋ねても、言葉を濁すだけだった。

そうして人手不足の為、如月は俺と同じように昼夜を“Beach Sound”で過ごしている。

「あの・・・大丈夫ですか？」

住み込みの部屋で、俺は如月の為に珈琲を淹れていた。日に日に顔色が悪くなる如月に、部屋を使ってくれと言ったのは自分だった。

「うん・・・。因幡くん、この珈琲美味しね」

手渡した珈琲に口を付け、誤魔化される。ぐったりとソファに身

体を沈めている如月は、明らかに具合が悪そうで、俺は付け置きの戸棚からビタミン剤を出した。

「気休めでしかないかもしれませんが、飲んで下さい」  
ビタミン剤が入っている瓶を手渡すと、青白い顔を綻ばせる。

「ありがとく、ごめんね？気を使わせちゃって」

如月は身体を少し起こし、ビタミン剤を大人しく口の中に放り込んだ。そのまま再度ソファーに沈むと、その瞳を閉じる。瞼に浮かぶ血管が痛々しく感じた。

顔色の悪い如月に、初めベッドを使ってくれと伝えたが、頑として承諾してくれない。

何時もリビングのソファーにその身を沈め眠りについていた。今日こそは、と思うのだけれども既に寢息が聞こえていて、だから仕方なく俺はリビングの電気を消し、静かにベッドルームに入ってしまったのだった。

今日もやっぱり、柵は休み。そうして青い顔をしている如月はホルに立っていた。

心配しながらもオーダーをとったりしていた俺も元に佐伯が姿を現した。

「あいつ・・・お前の部屋でどうだ？」

眉間に皺を寄せながらの言葉に、俺の胸はきりきりと痛む。明らかに如月を心配している姿に嫉妬を覚えてしまった。そんな自分に嫌気を感じる。自然と自分も眉間に皺を寄せていた。そんな俺の顔を見た佐伯が苦笑する。

「なんて顔してんだ」

ずっと大きな手が伸びたかと思うと、皺が寄ってしまった眉間にその指を這わせた。瞬間、顔が熱くなるのが解る。急いでその手を払わなければいけない、と思うけれど、伝わる熱が俺の思考を狂わせもつとその感覚が欲しい、と思ってしまうた。

今だけ・・・と思い、目を閉じる。

その時だった。

佐伯の鋭い声上がる。

「瑞希<sup>みずき</sup>?！」

そうして大きな手が離れて行く。

初めて佐伯が如月の事を名前で呼んだ、と妙に冷静に思い、

そうして何が起きたのか確認する為に目を開いた。

それまでの時間は、ほんの数秒だったと思う。

ざわりとフロアーが騒がしくなった。

視線の先には如月がいて、顔面蒼白になった彼はふらふらと倒れそうになっている。

そこに、俺に背を向けた佐伯が駆けつけ、すんでの所で如月を抱きとめた。

スローモーションのようにその姿が俺の網膜に焼きつく。

血相を変えた佐伯が如月を横抱きにしながら、そうして俺の横を通り過ぎ、消えていったのだった。

一時フロアーは騒然とした。けれど、バーテンダーが機転を利かせ俺を呼び、騒がせた詫びにドリンク一杯店からサービスする事を伝えると、波が引くように騒ぎは収まった。

安堵と共に疲れが一気に俺を襲う。

後ろに消えて行った2人を気にしながらも、なんとか仕事をこなし、そうして閉店を迎えた。

金勘定はできないけれど、他の片付けを終え住み込みの部屋に戻ったのは、閉店して1時間も後だった。

如月が倒れて3時間たっていたが、2人が姿を現す事はなくて、俺の心は崩壊寸前。

兎に角早くベッドに入りたくて、俺は急いで玄関のカギを開けた。

あまりにも疲れていて、何時もなら変化があれば直ぐに気付くはず

なのに、其れに気付かずにはベッドルームに向かう。そうして部屋に入った時、俺の動きは止まった。

目に飛び込んできたのは、俺のベッドにぐったりと横になっている如月と、そのか細い手を項垂れながら握っている佐伯の姿だった。世界が一気に灰色になり、自然と俺の瞳からは涙が零れる。そんな自分を叱責し、急いで涙を拭くと佐伯に声を掛けた。

「如月さん・・・大丈夫ですか？」

俺の存在に気付いていなかったらしい佐伯が、肩を揺らし顔を挙げその焦点を俺に向ける。

「あ、ああ・・・。今クスリ飲ませて眠らせた。・・・店、大丈夫だったか？」

呆けたような言葉に、引つ込めたはずの涙が顔を出し、俺は急いで下を向いた。

「・・・とりあえず片付けはしました。レジとかは手を付けられないのでそのままにしてありますが」

俺の言葉に佐伯は思い出したように頷く。

「そうか・・・レジやらなくちゃな」

そうは言ってもその瞳は如月を見ていて・・・俺の胸は余計に痛み出す。其れを振り払うように笑顔を浮かべた。

「明日でいいんじゃないですか？ちょうどお店休みですし」

「そう、だな・・・」

上の空の言葉。

もうこれ以上この場に居たくなくて、俺は静かに自室の扉を閉じた。瞬間、佐伯の小さな声が聞こえる。

「瑞希・・・」

その痛々しいまでの言葉に、限界だった。

如月がバイトを続けないか、と言ってくれたけれど、想い人が自分とは違う人間を見ていると解っている所に居られる自信はない。

契約が切れたら、またいつもの大学生に戻ろう、と決心した。

如月が倒れた日から、俺は仕事をこなすことだけに集中した。翌日には柊も帰ってきて、如月はいつもの業務に戻る。表情の固い俺に帰ってきた柊は眉間にシワを寄せた。

「因幡ちゃん、顔怖いよ?」

心配そうな言葉に、誰のせいだよ、と思う。

そもそも柊が仕事を休まなければ、如月はオーバーワークなどなくて済んだし俺があんなシーンを見ることもなかったのだ。

いや、違つと本当は解っているけれど、誰かのせいにしなければ残りのバイトをこなせる自信はない。

だから、八つ当たりと解つているけれど言わずにはいらなかった。柊さんが休んでたからですよ」

嫌味たつぷりに言つてみる。柊はポリポリと頭を掻き申し訳なさそうに笑つた。

「ん〜、俺も休みたかつたわけじゃないんだけどね」

余計にイラツとして、じゃあ、説明しろとばかりに柊を見る。

柊は少し困つたように笑い何かを思案した後、口を開いた。

「因幡ちゃんを信じて言うけど…、これ、絶対OFFレコだよ?!」  
妙に真剣な顔で言われて、ちよつと身体を引きながら頷いてみせた。

「今年の冬位に、新しい店ができるんだ。俺、そこを任される事になつてこの1週間オーナーと一緒に予定地の下見とかに行つてたんだよ」

新しいお店…。

更に詳しく聞くと、どうやら今回のお店は県外らしい。そこで、はたと気が付いた。

こんな俺にも焼きもちを妬き、鋭い視線を向けていた慧である。ただ黙っているはずはない。俺は柊の顔を覗きこんだ。

「慧はどうするんですか?」

俺の言葉にふわりと笑つ。

「大丈夫。慧には勿論一緒に来てもらうことになっているから」

羨ましい、と純粹にそう思う。

好きな人と同じ時間を歩めるのだ。それに比べて自分はどうかろう。好きな人には想い人がいて…その人にはどうやら恋人がいるらしいけれど、俺を見てくれる可能性は皆無ときている。

「い、なばちゃん…？何か有った？」

さっきまでここに顔だった柊が、急に真顔なつた。

「…え、何が…ですか？」

意味が解らなくて柊を仰ぎ見ると、その顔が困惑で歪む。

「何が…、因幡ちゃん泣いてるよ？」

柊の大きな手が俺の頬を撫でた。

続いて自分で頬を触り濡れた感触を確認する。

驚いて涙を拭うけれど幾重にも零れ落ちてくる涙を止める術は無く、小さな笑いと共にその手を両脇に降ろした。

「…は、はは…大丈夫です、もう止まり・ますから…」

強引に笑顔を作るけれど、口角が上手く上がってくれない。

心が締め付けられて、そこが破裂してしまったかのような痛みにもう立っていられそうになかった。

フロアーの、ぎりぎりまでに抑えられた照明に助けられ、俺は背を壁に預けながらその場に蹲った。

ぼろぼろと零れる涙そのままに、嗚咽を抑えるのに必死な俺を、柊は強引に立たせる。そうして腕を掴んだまま、仮住まいへ俺を連れて行ったのだった。

ソファーに座らされ、何処からか持つて来たグラスを握らされる。涙で曇る視界を何とか凝らし良く見ると、それは店のものだった。中身はレモネード。ちらりと柎ひょうひを見ると、とても困った顔をしていた。

その瞬間、俺の涙が潮を引くように姿を消す。自分の失態に今更ながら気付いて、そうして柎に申し訳なくて、顔を上げられないでいた。

「因幡ちゃん……。取り敢えずそれ飲んで？店長には、具合悪いって言っておいたから」

苦笑を浮かべながら、柎は自分もソファーに腰を降ろす。そうして優しく、俺の頭を撫でた。

「……。何があった？」

再度、そう聞かれる。色々あって、でも言える訳が無い。

俺は、小さく頭を振るしかなかった。

横から溜息が聞こえる。それでも頭を上げる事は出来なかった。

「……。言いたくなければ無理には聞かないけど、1つだけいいか？」

柎の言葉に、小さく頷く。

「あんま溜め込むと壊れるぞ？……。誰にも言えなければ、原因から少し離れる。そしてゆっくり考えて答えを出せば良い」

再び頭を撫で、そうして柎は部屋を後にした。

手の中のグラスに口を付けると、さわやかな酸味と優しい甘味が広がる。そうして俺は1つ決意をしたのだった。

「具合が悪いって聞いたけど、大丈夫なの？因幡くん」

翌日、喫茶の仕事に入った俺に如月が声を掛けた。上手く笑える自信がなくて俺は視線を外しながら口角を動かした。

「あ、はい、もう大丈夫です」

「そう？じゃあ、今日も宜しくね」

俺の言葉を信じてくれた如月は、ふわりと笑い俺に背を向けた。そんな如月を急いで呼び止める。

決意を実行する為にはオーナーである千葉を捕まえなければならぬ。千葉とどうやらお付き合いしているらしい如月に居所を確かめるのが一番早いと思った。

「あ、あの・・・オーナーとお会いしたいんですが、今日はどちらにいらつしやるか解りますか？」

振り向いた如月に口早に訪ねてみる。如月は少し驚いた顔をし、何やら思案している様子だった。

「んっ・・・急ぎ？」

其れはもう、勿論なので頷く。

如月は再び思案しそうして俺を見た。

「・・・今日なら、僕の家にいるはずだから、昼間終わったら一緒に来る？」

同棲しているのだろうか？などと余計な事を思いながら、願ったり申し出だったので受ける事にする。

「は、はい、お願いします」

ぺこりと頭を下げると、じゃあ後でね、と言う如月の綺麗な声がした。

其処は都内でも有数の高級マンションが立ち並ぶ一角だった。

目の前に見える大きなマンションも、良くTVでみかける物。

俺は驚きながらも、前を歩く如月に付いて行った。

最上階までエレベーターが、たいして揺れる事もなく上昇する。下に見える道路には、人がまるでありんこのように小さく見えた。

「散らかっているけど・・・どうぞ?」

カードキ で開けられた玄関をくぐると、今までに見た事もない広大なリビングが俺を出迎える。壁に掛けられた大きな薄型TVが見え、その前に白い大型のソファアがしつらえてある。

そこに大きな背中の人物が座っていた。多分、いや間違いないオーナーの千葉であろう。

俺は改めてここに来た理由を思い出していた。

「おんさん、因幡くんきましたよ」

如月がその声を掛け、ああ、やっぱり2人が付きあっているのは真実なのだと痛感した。

「ん?ああ、そう言えばそんなメール来てたな」

大きな背中が億劫そうに言う。俺は背筋を伸ばし、こちらを見ない千葉に頭を下げた。

「お寛ぎの所すみません。お話したい事があり、如月さんに無理を言っただんです」

俺の言葉に千葉は背伸びをし、漸くこちらに顔を向ける。何時もはカチツと髪をセットしているけれど、今はラフな感じになっていて、何時もより若々しく見えた。実際、千葉はいくつなのだろう、と漠然と思った。

「すみません」と思っなら来るなよ」

「おんさん!!」

千葉の言葉に如月は綺麗な顔を歪めた。

「はい、本当にすみません。でも、早い方が良いと思ったので俺の謝罪に千葉は苦笑を浮かべた。

「なんだよ、苛めがないの奴だなあ。まあいい。で?用件はなんだ?」

俺は再び背筋を伸ばす。そうして、一つ深呼吸をした。

「誠に申し訳ないのですが、バイトを辞めさせて欲しいんです」

「因幡くん?!」

「な、に?!」

如月と千葉は同時に声を上げ、そうして俺を見る。2人は一度お互いを見、千葉が口を開いた。

「何か不都合でもあるのか？」

怪訝な千葉の声に、下を向く。まさか真実を言える訳が無くて、ここに来るまでの間に考えた“理由”を伝えた。

「実は、所属しているゼミの教授に呼ばれまして、どうしても来て欲しいとの事だったので……」

嘘なのは自分が良く解っているから、やっぱり顔は上げられない。

「数日だけではないの？」

如月の声に、苦笑を浮かべた。

「毎日、という訳ではないのですが1日置きに行かなければならぬらしいんです……。本当にすみません」

一気に言つと、勢い良く頭を下げた。千葉と如月の深い溜息が聞こえる。

俺は頭を下げたまま、ぎゅっと目を瞑つた。

「そうか……。まあ、事情があるならしかたが無いな。でも、今週は頑張ってくれるだろ？」

言葉を選びながらの千葉に、嘘を吐いている自分がNOと言える訳もない。本当は今すぐにも“Beach Sound”を出たかったけれど迷惑を掛ける事も解つていたから、了承するしかなかった。

「それでは、お邪魔しました」

玄関で靴を履き、見送りに来てくれた如月に頭を下げる。頭を上げると思いもよらない真剣な眼差しがあった。澄んだ瞳が俺を捉えて身動きがとれない。

戸惑いながら如月を見詰めた。

「……本当に、大学が理由？」

核心を突く言葉に本当にフリーズした。ゆっくりと喉を動かす。

「……な、に言ってるんですか？」

「他に理由があるんじゃないの？」

まさか、気付かれています？

いや、そんなはずはない。誰にも気付かれないように、必死に隠してきたのだ。ましてや、想い人の想い人にばれるはずが無い。

俺はなんとか笑顔を作った。

「やだなあ、如月さん。俺だつてもつと働きたかったですよ？他に理由なんてあるわけないじゃないですか」

お願いだ、気付かないでと念じながら伝えると、如月は諦めたように息を吐いた。

「そっか、わかった。ごめんね、変な事言つて」

如月の固まっていた表情が融ける。

其れを見届けて、俺は如月の豪華なマンションを後にしたのだった。

「永久、具合はもういいのか？」

仕事着のギャルソンエプロンを巻いていると、突然佐伯の声が聞こえた。驚いて思わず飛び上がってしまう。

「ああ、悪い驚かせたか？」

申し訳なさそうな佐伯の言葉に急いで首を振った。

「あ、いえ大丈夫です、具合も・・・良くなりました」

言いながら振り向き、再度驚く。其処には自分を何時も以上に優しく見ている佐伯がいたのだ。

それは如月が倒れた時に見せた優しさとほぼ同じような気がして困惑する。

ただ、機嫌が良いだけなのだと自分に言い聞かせ、言葉が続けた。

「昨日はすみませんでした。途中で抜けてしまう事になってしまつて・・・」

頭を下げると、熱を伝える何かが頭の上に押し掛かった。近くに居る佐伯の身体で其れがあのだ大きな手だと解ると、嬉しさと切なさ俺を襲う。

込み上げて来た涙を急いで拭き取り、その手から逃れるように身体

をずらした。

頭を上げると、大きな手を拳に変え読み取れない表情の佐伯が立っていた。そうしてふいっと視線を外される。

俺は急いで居住まいを直し一礼をするとロッカールームを後にした。解っていた反応。

でも、目の当たりにすると胸が張り裂けそうな位辛くなる。

あと1週間。

それを乗り越えれば、もう二度と逢う事はなくなるのだ。こんな辛い思いをしないで済む。

きゅっと口角を噛締め、俺はフロアーに入っていた。

珍しく、バーにオーナーの千葉が姿を現した。

俺がバイトを始めて多分初の事だろう。

昨日、オーナーと如月（おとづら）に此処を去る事を告げた。千葉はフロアーに入ってくるなり佐伯（さえき）を呼び止め、休憩室に消えて行った。

「珍しい、オーナーが来るなんて」

注文を聞き終えた柊（はな）が俺の横に来るなりそんな事を言う。

千葉が姿を現した理由がなんとなく解っていた俺は言葉を濁した。

「どしたの？ 因幡っち」

何かを言っていた柊が突然言葉を向けて来る。え？ という俺の返事に苦笑を浮かべた。

「なんか、怖い顔してるけど・・・大丈夫か？」

柊は、妙に感じが良いらしい。微妙な俺の変化にしっかりと反応しているのだ。

「そうですか？ 別に何もないんですが・・・」

俺は言葉を濁し、フロアーに目を向ける。奥の席で、常連の女性が手を上げるのが見えた。

「あ、俺行つてきます」

ここぞとばかりに歩き出し、オーダーを受けに行く。

「因幡くん、あれオーナーの千葉さんでしょ？」

注文かと思えばそんな事を聞かれる。

俺は愛想笑いを湛えながら答えた。

「良くご存じですね。オーナーとはお知り合いですか？」

俺の言葉に客は頬を赤らめた。

「知り合い、というほどじゃないのよ？ 私が一方的にお慕いしているだけ。でも珍しいわね、千葉さんがお店に来るなんて」

お慕いしている、の所を強調して彼女は小首を傾げた。

綺麗な女性にそんな風に思われている千葉を羨ましいとも思ったが、何故だか自分もそう想われたとは思わない。そう想って欲しい人は違う人を見ているからなのかもしれないと思った。

「オーナーをお呼びいたしましょうか？」

俺の言葉に彼女の表情は一気に花開いた。

「ご迷惑でなければ、是非」

始めからそう言えば良いのに、と少しばかり嫌な気持ちを感じながら客席を離れる。そのままバックヤードを通り過ぎ休憩室の扉をノックした。

「・・・はい」

何故だか妙に低い声がする。それが佐伯の物だと解るまで少し時間がかかった。

1つ呼吸を置き声を発する。

「御話し中申し訳ありません、オーナーにお会いしたいというお客様がいらつしやるのですが・・・」

一気に言い返事を待つと休憩室の扉が開いた。

「何処のどいつだ」

機嫌の悪そうな声とは裏腹に、不敵な笑顔を浮かべた千葉が顔を出す。

「奥のテーブル席の方です」

負けないようにお腹に力を込め伝えると、わかったと言い千葉は歩きだした。すれ違う瞬間、不敵な笑顔が少し困ったような其れに変わり、俺の目を見る。

「？」

意味が解らずその背中を追うけれど、千葉は振り返る事はなかった。意味の解らない視線を送られて、俺はそのままフリーズしてしまう。見える事はない千葉の背中を追いかけていると、頭上から地を這うような、恐ろしい声がした。

「おい」

そのまま腕を強く掴まれ、休憩室に引き込まれる。

抗わなければいけなかったのに、驚きの方が強くて身動きがとれなかった。

そのままの勢いで壁に強か背中を打ち、その衝撃で痛みより息苦しさを感ぜむせこむ。

なんとか呼吸を整え、潤んだ瞳をそのままに、乱暴なまでの態度を非難しようと顔を上げ、今度は違う意味で固まった。

いつにない苦しそうな、それでいて悲しく、しかし熱のこもった顔見たこともない佐伯の表情に、言葉は完全に成りを潜めてしまった。しばしお互いを見詰め合った後、視線を先に外したのは佐伯。俺は詰まっていた息を気付かれないうように吐いた。

「…なんで辞める」

沈黙を破ったのも佐伯で、その質問に俺の息は再び詰まる。視線を外した佐伯の表情は読み取れなかった。

「えっ、と…大学の関係で、どうしても働く事が難しくなっちゃったので…」

千葉と如月に吐いた嘘を、佐伯に伝える。

佐伯の眉間にそれはそれは深いシワが刻まれた。

その反応が何故だか苛立ちを産ませる。

別に、ただのバイトなのだ。その他大勢の中の1人に過ぎないと、嫌と言うほど解っている。なのに、そんな反応をされるとあるはずのない可能性を思ってしまう。少しは自分の事を見てくれるのではないか、と…。

だから、俺は視線をソロリと佐伯に向けた。一瞬視線が絡み合う。

だけれどやっぱり視線を反らせたのは佐伯だった。そうして紡がれた言葉に大きなダメージを受ける。

「…辞めるのは別に構わないが、俺も一応店長という名がついているんだ。相談があっても良かったんじゃないか？」

辞めるのは構わない、と佐伯は言った。つまりはそう言う事か、と絶望を感じて口から渴いた笑いが零れる。

佐伯は驚き掴んでいた腕を放した。

急いで腕を自らの方へ引き寄せる。そうして今度こそ視線を逸らさずに佐伯に向けた。

「なんの相談もせずすみませんでした。でも相談するほどの事案ではなかったですし、ほぼ決定事項だったもので」

自分でも驚いてしまうほど冷たい声音で、まるで捲し立てるような言い様だった。

「ちょっと待て、俺が言いたい事は」

佐伯の表情が一転したけれど、一度滑り出した感情は止められない。佐伯の焦りを含んだ言葉を強引に遮り更に冷淡な声を紡いだ。

「店長というプライドを傷付けてしまい申し訳ありませんでした。ただのいちバイトなもので、配慮が足りませんでしたね」

卑屈な笑みまでも零れてきて、もう立っているのもやっとで…。ふらりとしていた俺の腕が痛みを覚えた。そうして視界が大きく揺れる。

身体が弧を描き、強い力で部屋の壁に背中を押し付けられ、佐伯の怖い顔が覗き込んで来た。身体を反らそうにも、壁が邪魔をし身動きがとれない。

ある種の嫌悪を抱き、佐伯を睨み付けた。

「放してください」

荒れる心とは裏腹に、静かな声が零れる。

その瞬間、スツと佐伯の大きな手が動き、思わず目をギョツと閉じた。

殴られる、と思ったけれど強い衝撃は訪れずに柔らかく頬を擦られる。困惑と共に目を開けようとした時、妙に優しい声音が聞こえた。「なんで泣いている」

そうして、親指で目の下を再度擦られた。

いつの間にか溢れていた涙を認識して、思わず佐伯の手を振り払っていた。

「逃げるな！」

強い声で言われて固まる。

「まだ答えを聞いていない。お前は俺の事を責めているのに、なぜ泣いている。答えろ」

そんなの決まってる。

大好きな人に悪態を吐き、その前から消えようとしているのだ。多分もう二度と会う事はないだろう。

好き、という気持ちも伝えられないのだ。

キリキリと痛む胸を堪えようにも、多分もう限界だったのだ。静かに消えようとしているのに、この人はそれを許してくれない。

いつそのこと想いをぶちまけ、清々しいまでに玉砕してしまえば良いと思った。

そらしていた視線を上げる。ついでに涙を乱暴に拭った。

「・・・あなたの事が好きになりました！でも、あなたには想っている人がいますよね。俺はまだまだガキだから、気持ちにそう簡単には蓋をできないんですよ・・・！！」

1度強く目を閉じ、キツと佐伯を睨むと驚きに見開いている瞳があった。清々しいまでに玉砕、と思っていたけれど、臆病な俺は全身で答えを聞きたくない、と思ってしまう。

佐伯の形の良い唇が動き、言葉を紡ぐ前には心が折れてしまっていた。折角、形を潜めた涙が再び溢れ出す。

だから言葉が音になる前に、失礼します、と告げ踵を返した。

・・・はずだった。

なのに、今自分は扉を背にしている。

視界を阻んでいる物が何なのか解らずに声を出そうとするけれど、やっぱり唇を何かに塞がれていてそれも出来ない。

唇にかかる温かい風が、思考をストップしている自分に唯一わかる感触だった。

ぼやけていた障害物がゆっくりと動き、そうして温かい風も遠のいて行く。

瞬間、今自分に何が起きていたのか理解した。

自分の視界を遮っていた物が佐伯の顔で、触れていた温かい風は佐

伯の呼吸だったのだ。

ここまで来て、漸く自分がキスをされたのだと解り、赤面すると共に左手の甲で顔半分を覆い隠す。

想い人に触れられたこの唇がとても愛おしい物に感じ、そうして悲しみの対象にも感じてしまう。

抱き締めて大事にしたいような、筆り取り燃やしてしまいたいような、そんな複雑な感情が俺を襲った。

好きな人からのキスは、本当はとても嬉しい物で、ただただその人の腕に抱き締めてもらえると核心出来る物。

だけれど・・・これは違つと、キリキリと痛む胸が教えてくれた。

佐伯は自分の行動にこそ驚いている様子で、ただ呆然とこちらを見ている。

「・・・同情・・・ですか？それとも、報われない俺の気持ちを弄んでいる、とか？！」

もう、何も見えなかった。

おい！つと言う佐伯の言葉には振り向かずには駈けだしていた。

そのままフロアーに飛び出し、危うく柵にぶつかりそうになる。

「危ねえな！・・・？！因幡つち、何処行くんだよ、おい！！！」

謝るのもそこそこに、背後に聞こえる柵の声にまるで追われるかのようにそのまま Beach Sound を飛び出した。

ただただ、一秒もここには・・・、佐伯の前にはいたくない、と強く思った。

あれからどうやら俺は不眠症になってしまったようだった。

自宅のベッドで横になると、あの日の光景がフラッシュバックのよう  
に思い出される。

目を閉じ、軽い睡魔に襲われてもなかなか寝付けない日々が続いて  
いた。

色々な物を Beach Sound に置いてきてしまったけれど、  
生活に困る程ではないので敢えて取りに行くつもりもなかった。

「はあ……」  
出るのは溜息ばかり。

毎日、忙しい程にバイトに精をだして働いていたから、こつやる事  
がなくなると手持無沙汰になってしまっらしい。

「……バイト、探そうかな」  
独り言を呟いて、俺は唯一持ち出して来た携帯に目を向けた。

逃げ出すように、と言うか、本当に逃げ出して来たのだが……と  
ても後味の悪い物を感じてしまっけれど仕方ない事。あのままあそ  
こに居たら、多分壊れていた。

「これで……良かったんだよ」  
自分に言い聞かせ、ベッドから身体を起こす。その時だった。携帯  
が着信を告げたのは……。

恐る恐る液晶を確認すると、見知らぬ番号で戸惑う。  
取るべきか取らざるべきか悩んでいる内に着信は途切れた。妙な緊  
張に包まれていた俺は、詰まっていた息を吐く。その瞬間、再度携  
帯が音を立てた。番号はさっきと同じで、一瞬悩んだけれど通話の  
ボタンを押していた。

携帯を耳に当て、恐る恐る聞いてみる。

「・・・はい？」

一瞬の間があり、返答があった。

『因幡っちの携帯ですか？』

電話の向こうの声は、柊ついでだった。緊張が解け肩から力が抜ける。

「はい、そうです。柊さん、ですよね？」

俺の問いかけに柊は溜息を吐いた。

『突然いなくなるからびつくりしたよ。因幡っち元気？』

優しい声音に何故だか涙が溢れる。柊にはばれないように気を付けながら答えた。

「ご迷惑お掛けして、申し訳ありませんでした。柊さんはお元気でしたか？」

『おう、元気だよ。今休憩時間なんだ』

不思議と、涙と共に笑顔が浮かぶ。店を飛び出してからそう時間は経っていないはずだけれど、懐かしく思えた。

「そうなんですか、お疲れ様です。・・・ところで柊さん、俺の携帯番、良く解りましたね」

俺の言葉に、ああ、そんなの簡単だと答える。

『因幡っちの履歴書見せてもらったんだよね、オーナーに』  
成程、少し考えれば解る事か。そう言えば履歴書の連絡先は携帯番号を記した事を思い出す。

「そうでしたか・・・。ところで、何か御用でしたか？」

世間話をする為に連絡してきたのだろうか、と思いながら聞いてみた。

『ああ、そうだった。慧けいがさ、因幡っちに会いたいつてうるさいんだよね。そっちの都合でいいからさ、近々会えない？』

綺麗な、しかし意思の強そうな柊の恋人を思い浮かべる。そういう事なら、と俺は承諾をしたのだった。

携帯の液晶を確認する。

柊と約束をしたのは、慧の職場の前だった。慧は今日早番らしく、後10分程で終わりその後3人で食事に行くという計画らしい。

「悪い、待ったか？」

液晶を見詰めていた俺に、柊の声が掛けられた。

振り向いた先に柊は立っていた。その手には何やら紙袋が握られている。

「いえ、たいして待っていませんので…」

俺の言葉に破顔する。

「ああ、これ、如月さんきんづきから預かって来たやつ…」

そう言っ手渡された袋の中を確認すると、あの部屋に持ち込んだ、大学の教材だった。

表向きの理由が勉強だったから、これはまずい事をしたらしい。

俺は苦笑を浮かべながら、其れを受け取った。

「・・・なあ、なんか」

「おつまたせー!!」

袋を渡した柊が何かを言おうとした時だった。店内から勢い良く飛び出して来たのは待ち人の慧。

柊の溜息が聞こえたけれど、それよりも威勢の良い慧が早速俺に絡みつく。

「永く〜！元気だった?!」

そのあまりにも強引な態度に、柊共々笑顔になる。

「はい、なんとか…」

微苦笑を浮かべると、慧のつるりとした頬がぷっくりと膨れた。

「もう！僕たち親友なんだから敬語はなしなのにい！」

そんな抗議を受け、答えに困ってしまう。

更に首に腕を絡ませ、下から甘えたような視線を向けられると、その気もないのに何故だか少しドキマギしてしまう。

そんな困って状況を助けてくれたのはやっぱり柊だった。

「こら！慧、俺がやきもち妬いちゃうだろ?…因幡っちから離れなさい」

嘘なのか本気なのか解らない低い声に、背筋が凍ってしまふ。それでも、えー？！と不満たらたらにまだ俺に絡まる慧に、俺は頼むとばかりに視線を向けた。

「お願いします、離れて下さい。：俺、まだ死にたくないです」  
頼み込むと、漸く慧は絡ませていた腕を解いてくれた。

本当に柎の視線が怖かったから、安堵の溜め息を吐く。柎は己の態度を後悔したのか、苦笑を浮かべていた。

「じゃあ、行きますか？」

慧の合図で歩き出した俺は、前を歩く2人を見詰める。

回りの視線なんか関係ない、とばかりに手を繋ぎ楽しそうに話している姿に、少し嫉妬を覚えた。

自分は想い人に振り向いてもらえない。

想いを伝えたのに、物凄い仕打ちを受けて振られてしまったのだ。

あんな風に仲良くしたいと思う事さえも許されない。

だけれど、心の中でそして頭の中で思い出されるのはちょっと怖そう  
うで、しかし本当は情が深く、一途に想い人を見ている大きな手の  
あの人の姿。

諦めなければ、と思うのになかなか心は言うことを聞いてくれそう  
になかった。

再度2人の姿を見て、羨ましいと思うと共に、冷えた笑みが込み上  
げてきて、急いで口角を引き締めた。

「因幡うち、ここでいい？」

一軒の店の前で徐に振り向いた柎が聞いて来る。ここ近辺にどのよ  
うな店があるのかはまったく解らない俺は、素直に了承した。

そこはこじんまりとした店だったけれど、静かな空間があり、ホッ  
と息を吐くには丁度良い。

通された席は、奥座敷だった。

「良く御2人でいらっしゃるんですか？」

前に座った2人に聞いてみると、どうやらそうらしい。手際良く注  
文し終わった柎は、何やら慧に目配せを送っている。慧は苦笑を浮

かべながら、俺に向き直った。

「もう、回りくどい事は言わないよ。だから永久も正直に伝えて」前置きに、取り敢えず頷く。

「・・・佐伯さんと何があったの？」

どストレートな質問に息が詰まるかと思った。

「急にバイト辞めたのも、大学が理由じゃないでしょ」

流星は年上、という所か・・・。

前置きに、取り敢えずだったけれど頷いてしまったから、多分嘘は吐けない。ましてや、大学は嘘、と言われてしまっているのだ。視線を上げると、困ったような柊の顔があった。

「・・・はい、大学が理由ではないです」

俺の返事と同時に座敷の扉が開かれて、注文の品が運ばれてくる。

一旦言葉を止め、並んで行く食事に目を向けた。

仲居さんがお辞儀をして出て行くと、今度は柊が言葉を発した。

「俺は、因幡うちの全てを知っているわけじゃないけど、何にも言わずに飛び出して行くような辞め方をする人間じゃないと、解釈しているんだ。其れにその後、佐伯さんと千葉さんがもの凄い良い争いして、佐伯さんめちゃくちゃ機嫌悪かったんだよね・・・」

あの後そんな事があったのか、と何処か遠くで漠然と思う。慧が其れを咎めた。

「他人事、ってな感じに受け取ってない？間違いない、永久が絡んでるよね？」

そう言われて、誤魔化す事を辞める。きつと慧に、柊に嘘を言っても見破られてしまうと思ったから・・・。

「・・・俺、佐伯さんの事が、好きになっちゃったんです。でも、あの人には好きな人がいますよね？慧も以前にそう言っていましたよね？気持ちに気付いた時はそれでも同じ空間に居られれば良いと思っっていました。でも、如月さんが倒れた時、やっぱり限界だと思っただんです。・・・それで、オーナーと如月さんに嘘を・・・」

一気に言葉にすると、封印していた涙が再び溢れてくる。必死に涙

を拭いながら、苦笑を浮かべた。

「・・・そっか」

黙って聞いていてくれた慧が小さく言葉を吐く。

「ごめん。まさか永久が佐伯さんの事好きだなんて知らなかったから、パーティーの日悪態吐いちゃって・・・。耳に入れなくても良い情報与えちゃったね・・・」

眉を八の字に曲げながら苦しそうに言う慧に、柊の優しい拳がその形の良い頭に軽くぶつかった。

「だから、後先考えずに物を言うなよって言っただろう・・・？」  
柊の言葉に慧は鼻をすすりながら頷く。しかし、急いで俺の方を向いた。

「でも、でもね？・・・佐伯さんにははっきり認識して欲しかったんだ。如月さんは他の人を見ているって事。それで、佐伯さんに新しい恋をして欲しかったんだよ・・・」

僕たちにとっては大切な人だから・・・と呟く。  
どういう意味だろう、と柊を見ると苦しそうな、でも優しい表情をしていた。

「・・・俺と慧、始めは色々と大変だったんだよ。でも、佐伯さんが間に入ってくれた。それで今はラブラブって事に・・・ね」

しんみりと語りそうして再びお互いを優しく見詰める。なんだかこちらが恥ずかしくなって、こほん、とせき込み、さっきから美味しそうな香りを漂わせている料理に目を向けた。

「あの・・・そろそろ頂きませんか？折角の料理が冷めてしましますし・・・」

俺の言葉に2人は世界を作っていた事に気付き、申し訳なさそうな顔をする。そうして、取り敢えず食事をする事となった。

「はあ、美味しかった」

慧が食後の焙じ茶を飲みながら言う。柊も俺も同意した。

「食事中、僕色々と考えたんだけど・・・」

湯呑みを置きながら慧はちらりと俺を見た。

「なんだ？突然」

柊が疑問を口にする。慧はそれに小さく頷き、居住まいを正した。

「兎に角、もう一度永久は良く考えた方がいいよ。その・・・キスして来た真相もちゃんと聞いてないんでしょ？」

思わず飲んでいた焙じ茶を吹き出しそうになる。・・・どうやら勢いに任せて、その事も話してしまったみたいだ。誤魔化す事は無意味と知っているから、素直に頷く。

「確かに、怖い状況ではあるけど、ちゃんとした理由があるかもしれない。・・・だから話し合いしたほうがいいと、僕は思うな」

にこりと笑顔を浮かべて綺麗に言いきる。

俺はとても曖昧に頷く事にした。

そんな反応に2人は顔を合わせ、困ったように笑っけれど、自分では決心が付かないのが現状で曖昧に笑っしかない。

「店に来辛いなら俺が場所作ってやるよ？」

そんな言葉に、俺は急いで首を振った。

「なんなら、今から呼ぼうか？」

慧が拍車を掛けたように笑いながらそんな事を言うから、仕方なく店に行く事を約束した。

「荷物もありますから・・・」

そんなしなくても良い言い訳をしながらの言葉に、2人は心底嬉しそうに笑ったのだった。

大きく溜息を吐く。

柁ひしひと慧けいの3人で食事に行った翌々日、俺は飛び出したはずの“Beach Sound”の前に立っていた。

荷物を取りに来ただけ、と自分の言い聞かせ、それでも一步を踏み出せないでいる状況に苦笑する。

ちよつと前まで、世界の終りのように沈んでいた心が、こんな状況だけれど想い人の姿をこの目にできるのだと思うと、ふわりと暖かくなった。だけれど、やっぱり怖い。

あんな風にキスされて飛び出して、どんな顔でこの扉を開ければいいのかと思ひ悩んでいた。

「と・・・わ？」

全ての思考がストップする。自分の姿を覆い隠すかのような影がかかったかと思つたら、今一番聞きたい、けれど聞きたくない声が、頭上から聞こえた。

振り向く事が出来なくて、ただ一点を見詰める事しか出来ない俺の身体が抱きすくめられる。

突然の事に逃れようと身体を擦ると、耳元に熱い吐息が掛り安堵したような声が聞こえて、俺の顔はそれはもう真っ赤に染まってしまった。

「よかった・・・」

背中に感じる鼓動と身体に回された腕の暖かさに吐息が零れる。

「さ、えきさん・・・」

「この間は悪かった。お前を傷付けようと思ったわけじゃないんだ・・・」

苦しそうな声に、心臓が驚掴みされたかのように驚き、そうしても

うごつても良いと思った。

痛い程の傷になってしまっていた全てが、怒鳴り散らしたい程の想いがはらはらと解れていく。

現金な程の自分の思考回路に火が出るのでないか、と思う程顔が熱い。

震える自身を奮い起たせ、絡まる逞しい腕にそつと手を添えてみた。途端に視界が揺れて、身体の向きを反られる。そうして痛い程の口付けを施された。

息もできないくらいに口付けられて、酸欠になる。そこで漸く唇が自由になった。

肺一杯に新鮮な空気を吸い込み、息を整えた。

再度ギョツと抱き閉められて頭上から苦笑交じりの言葉が降って来る。

「はあ…、悪い、俺余裕なさ過ぎだよな」

俺は目を閉じ、筋肉のしつかりついた広い胸に頭を預けた。

「…大丈夫です…」

手には温かいカップが握らされている。

中身はレモネード。

鼻を擽る爽やかな香りに、火照っていた心が少し落ち着いていた。

ここは店の奥にある、俺が住み込んでいた部屋。

飛び出した日と何一つ変わっていないように見えた。佐伯は困ったような、照れ臭いような顔をして、俺の隣に座っている。

ふと、店は大丈夫なのかと思い佐伯を見た。

「あの佐伯さん…」

声を掛けると身体を揺すりながらも顔を上げてくれる。

「な、なんだ？」

きつくならないように注意しているのか、少しどもりながら答えてくれた。そんな反応が、なんだかとても年上なのに可愛いと思えて

しまう。

俺は相好を崩しながらも言葉を続けた。

「あの、俺荷物を取りに来ただけなので、お店に行って下さい」  
話しは又今度すればいい。もしくは、店が終わるのを待っていても  
良いと思っただけ言っただけに、佐伯の表情は一変し、今にも泣いて  
しまいそうな程悲しいそれへと変わってしまった。

そうして気付く。言葉が足りなかったと言う事に……。  
あわてて言葉を紡ごうと思っただけに、それより先に佐伯が言葉を発  
していた。

「行かないでくれ」

あまりにも真剣な、そうして必死な言葉に声が出ない。じっと見詰  
められて息が止まりそうになった。

「……ちゃんと、俺の話を聞いてくれ」

熱の籠った視線に、頷く事しか出来ない。ぎゅっと拳を握り、佐伯  
の瞳を見詰め返した。

「まずだ。お前がこの間言っていた事について、訂正したい事があ  
る」

訂正？

なんの事なのか解らないけれど、頷いておく。

「俺には想っている奴がいる、と言っただけ？」

想い人の顔が見れた事で、すっかりと失念していた。抱き締められ  
て、キスされて、のぼせ上っていたのだ。自分が必要とされている  
と勘違いしてしまった。

己の浅はかさに穴があったら入りたい、と真剣に思ってしまう。  
そうだったのだ。幸せな夢はあつと言う間に過ぎ去り、現実へと引  
き戻される。

佐伯には、ずーっと前から好きな人が居たのだ。俺が間に入り込む  
余地などない程に……。

鼻の奥がつんつと痛くなり、慌てて目を強く閉じた。

「……永久？」

俺の変化に敏感に反応した佐伯が、心配そうに声を掛ける。

ここで、泣いてしまったら迷惑になってしまう。必死に涙をこらえ、俺はソファから立ちあがった。

「ご、ごめんなさい！」

勢い良く頭を下げると、佐伯の気が抜けたような声が聞こえた。

「俺、頭悪くて・・・あの時いっぱいだったから佐伯さんの迷惑も考えずに変な事口走ってしまったって、まるで八つ当たりのようでしたよね・・・？あの時の事はどうか忘れて下さい！・・・俺も忘れれますから・・・」

あ、やばい、と思ったけれど涙が一筋頬を伝ってしまふ。急いで雫を払い、踵を返そうとした俺に怖い程の聲が降りかかってきた。

「忘れられるか！・・・忘れる必要が何処にある？お前は人の気も知らずに自己完結したのか？！」

驚きで涙も息も止まってしまう。怖い顔で俺の事を睨みつけている佐伯を、呆然と見詰めた。

一拍の呼吸の後、佐伯の表情が柔らかい物に変わり、俺はホッと息を吐いた。

「兎に角・・・俺の話最後まで聞け」

そう言われて、力が抜けたかのようにソファに腰を降ろす。其れを確認し、佐伯は再度話出した。

「もう一度言うぞ？この間お前は、俺には想っている奴がいる、と言ったな？」

静かにそう言われて小さく頷く。フッと佐伯の溜息が聞こえた。

「それはちよつと間違いだ」

えっと思ひ顔を上げると、存外に優しい顔で俺を見ている佐伯の視線とぶつかった。

「確かに今俺には、好きな奴がいる」

目の前が真っ暗になる。やっぱりそうなのではないか、と暗い気持ちになり目を閉じた。

「お前が言った好きな奴ってというのは、如月の事だろう？...慧が言

つてたからな、そう思われても仕方ないな」

溜め息に戸惑った。

「そう、なんですよね？」

絶望を覚悟で聞いてみると佐伯の困ったような顔があった。

「俺と如月は、腐れ縁みたいな物だ。確かに一度はあいつの事を大切に思った事もある。でもそれは恋ではなかったんだよな。事実、あいつが千葉さんと付き合うようになった時、シヨックより安堵の方が大きかった」

え？それって？と視線で問えば苦笑が返される。

「あいつ、凄く身体が弱かったんだ、ガキの頃」

なんとなく、そうなんだろうなと思いつくと、佐伯の優しい眼差しが俺を包んだ。

「だから、俺が守らないといけないと思ったのが始まり、かな？」

佐伯の話では、身体の弱い如月はまるで弟のようで目が離せなかったという。今にして思えば、その思いを恋心と勘違いした、らしいのだった。

「だから、俺以外の人間が如月を守ってくれると解った時、肩の荷が降りたように感じたんだ」

そう、話をくくられる。

解ったような、解らないような・・・、俺は曖昧に頷いた。

では、今佐伯の心を締めているのは誰なのか・・・俺には検討もつかない。

佐伯が何故自分にこのような昔話をしたのかも解らなくて、自分なりに結論を考えてみた。

兎に角想い人は如月ではないこと。でも今好きな人が居る、ということ。

俺の気持ちに誠実に対応し、でも応えられないと言おうとしていること。

だったら、この間とさっきのキスはなんだったのかという思いが、俺の心を占領した。

そうして、こうやって佐伯の話を書く事に何の意味があるのかと疑問に思う。

だんだんと話続けている佐伯の声が遠くなり、そうして全ての音がシャットアウトされ、自分の鼓動の音だけが耳の中に響いた。

柘と慧には申し訳ないが、これ以上は無理、と思った時、自分の鼓膜を伝って嫌な音がした。それが己の卑屈な笑いだと理解する。

ソファから立ちあがり、佐伯の前に立つと、その端正な顔を眺めた。

「・・・じゃあ、佐伯さんの好きな人って・・・？」

まるで吐き捨てるように呟くと、視界が歪む。

全てを諦める為に、絶望を覚悟で問うと自らの瞳から雫が零れた。

佐伯の顔が涙で見えない。

「佐伯さんの好きな人が如月さんではない事は十分に解りました。

・・・だからもう教えて下さいよ。俺の苦しみを早く終わらせてよ。

「！！！」

絞り出すように叫ぶと、腕を掴まれその大きな胸に抱きしめられた。

ぎゅっと、息もできない程に抱き締められて、じたばたともがく。

そんな俺の耳に、低く甘い声が囁かれた。

「お前の事が好きなんだよ」

耳に告げられた甘い囁きに、足の力が抜ける。

かくんと膝の力が抜け、佐伯の驚いた声と共にしっかりと抱き抱えられた。

「おい、大丈夫か？」

優しい佐伯の声に、耳まで赤くなった俺は顔を上げられずに頷く。頭上で、佐伯の低い笑い声が聞こえた。

「ちゃんと聞こえたか？」

笑いを含んだ声に、再度頷く事しか出来ない。

「・・・俺の好きな奴が誰だか解ったか？」

笑を引つ込めた真剣な声に、さっきの言葉が実は空耳なのではないかと疑心暗鬼になってしまつて、素直に頷けなかった。

ぴたりと止まる俺の頭上で盛大な溜息が聞こえる。

「俺の、真剣な告白が、お前には届かない、とそう言う訳か・・・？」

少し責めるような、少し悲しいようなそんな言葉に胸が締め付けられた。

それでも、真実がその裏にあるのではないかと勘ぐつてしまつ。

「・・・でも、だつて・・・」

何かを言わなければと思うけれど、言葉にならない。そうしたら、更に強く抱き締められた。

「初めてお前を見た時、随分と綺麗な顔の奴が来たな、と思つたよ。身体も細いし、ほら内の仕事つて何気に力仕事多いだろ？」

“綺麗な奴”と言う所には納得できないけれど、確かにBeach

Soundの仕事は見た目と反して力仕事が多い為、素直に頷く。「もつのかと心配したけど、元来負けず嫌いなんだろうな。がむし

やらに頑張る姿を見て、なんだか嬉しくなったんだ。そしたらもう視線が外せなくなつて……。そんな自分の反応に名前が付けられなくて困つてる時、柊ひらから言われたんだ」

何を？と顔で問うと、佐伯の顔が苦渋に満ちた。

「因幡いんぱんのちの事が好きなんですよ」って」

その言葉が浸透してくると、ふとこの前の柊ひらと慧けいの姿が浮かぶ。

「・・・あの、この間柊さんから連絡があつて、慧と3人で食事をしたんですけど・・・」

まさか、あれには其れが絡んだ意味があるのか、と思った。

「ああ、お前が飛び出して行つた日、あの2人にくどくどと言われたんだよ。“何やつてるんだ”って」

その時を思い出しているのか、苦笑を浮かべながら佐伯は言う。と言う事は、あの2人は全てを知っていたと言う訳か。

なんだか無性に腹が立つて来て、思わず眉間に皺を寄せてしまった。佐伯が困つたふうに笑い、その皺を伸ばしてくれる。

「そんな顔するな。あの2人も悪気があつた訳じゃない。お前の事が心配で、慧なんか柊ひらに止められるまでくどくどと文句言つてたな。あの夜の慧の言葉を思い出す。

確か、しっかり話あえ、と言つていたな。確かに物凄く心配されていたのは解つていた。あの2人の顔が脳裏に思い浮かんで、自然と口角が緩んだ。

「そう、お前の・・・永久とわの笑顔をもつと見たい。だから、何処へも行くな・・・」

真剣な声に、どきりと鼓動が大きくなる。

言葉の端々で、佐伯の想いが伝わった。信じて・・・いいのだろうか？

しかし、オーナーの千葉ちのばと昼ひるの店長みせのちやう如月に嘘うその理由を付け辞める事を伝えてしまつている。今更、店に戻る事は出来ないと思つた。

「でも、俺店に嘔吐おうといて辞めてしまつたから戻れません・・・」

佐伯の近くに居たいけれど、それはもう叶わない事。其れを伝える

と、一瞬ぼかんとした後大きな笑顔となった。

「ああ、それなら心配ない。オーダーも如月も永久の嘘はお見通しだ。お前の退職は既に撤回されてるよ」

そんな事を言う。今度は自分がぼかんとする番だった。

「だから、なんの心配もなく明日からバイトに来てくれ」

あの日の如月と千葉の顔を思い浮かべる。

その顔が不敵な笑顔に変わり、俺は苦笑を浮かべたのだった。

「因幡っち、オーダー上がったよ！」

ギャルソンエプロンをはためかせながら、柊が声を上げる。

俺は大きな返事をし急いでオーダーされた物をシルバーのトレイに乗せ、客の元に向かう。

素早くテーブルに乗せると、常連客の女性が破顔した。

「因幡くん、暫く見なかったから寂しかったわ。元気だった？」

そんな事を言われ、口ごもってしまう。

「えと、ちよつと大学の方に行かなければならなかったもので・・・」

初めに吐いた嘘を、さらつと試してみる。女性は笑みを広げて喜んでいた。

素早く挨拶をし、その場を後にする。振り向いた先に佐伯の姿を確認し、自然と頬が緩む。佐伯も俺に気付いたようで、軽くその手を挙げた。

昨日の如月と千葉の言葉を思い出し、秘かに笑ってしまう。

恐る恐る声を掛けた俺に

『ああ？漸く佐伯が告白したか。まったく面倒臭い』

吐き捨てるように言う千葉に、如月が苦笑を浮かべた。

『また諒さんひんあそんな事言つて・・・。因幡くんが居なくなつた後の音羽おひなを一番気遣つてたのは諒さんじゃなかったでしゅけ？』

茶化すような如月の言葉に、千葉は嫌な顔をする。

『何でも良いが、兎に角仲良くしてくれ。これ以上あいつの湿気た顔つらなんぞ見たくないからな』  
そんな事を言っていた。

佐伯が自分の言動で、千葉の言う“湿気た顔”をしていたのかと思うと、嬉しさと恥ずかしさでにやにやと笑ってしまふ。

あの後、沢山口づけされ、『もう我慢できない』と言う佐伯と熱い肌を交わした。ベッドの中で佐伯は何度も自分の名前を囁き、そうして名前で呼ぶよう強要したのだ。

恥ずかしさと困惑の中、2人だけの時ならと約束してしまったけれど、はつきり言って自信がない。

自分と佐伯は出会ってからまだ時間が浅い。

如月との時間を見れば比べ物になどならないのだ。自然と佐伯を名前で呼ぶ如月に、羨ましい、と思う反面イッチョマエに嫉妬しているのだと自分でも解ってしまつて戸惑う。

だけれど、自分と佐伯の時間はこれからなのだ。

長い時間を、多分一緒に歩いて行く中で、衝突も沢山あると思う。

歳が10近く離れている事も、きつとネックになつていくはずで・  
。

だけれど、何故だか今の自分はきつとそれを乗り越えて行けるはずだと核心している。

何時か大勢の前で、佐伯の事を名前で呼べるように日々頑張つて行こうと強く思い、軽い足取りでフロアーに戻つたのだった。

STORY 12 (後書き)

やっと、終わりました……。

じれったかった……、この2人。

漸く、お互いの気持ちを確認できて、本当によかったです。

拙い文でしたが、最後までなんとか書けました。

最後まで読んで下さった方、ありがとうございました>m (

m <

今後は、もっと上手に描けるよう頑張っていきます。

ほんとうに、ほんとうに、ありがとうございました!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4349m/>

---

Beach Sound の恋

2010年10月27日01時43分発行